様式2

令和元年度（平成31年度）　自 己 評 価 表

鳥取県立八頭高等学校

中期目標（学校ビジョン）	
	1　主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。 2　チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。 3　地域連携の主体となり、地域に根差した学校としての役割を果たす。

今年度の重点目標

1．授業に集中　①高校生活や授業におけるルールやマナーの徹底　②生徒の自宅学習時間の確保　③AL9の視点による公開授業等の実施
2．行事で団結・部活は熱中　①地域から信頼される学校づくり　②生徒の悩みへの的確な対応　③学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営
3．進路に挑戦　《探究》地元大学との積極的な連携、高い志望に挑戦　《総合》多様な進路に対応、第一志望を目指す　《体育》全国を目指す、基礎学力を確実に育成
　①進路実現に向けて努力している生徒の割合の増加　②国公立大合格者数の増加
4．学校業務改善の取組を進め、生徒への学習・生活・進路指導等の充実を図る

年度当初					評価結果（3）月		
評価項目	評価の具体項目	現状（平成30年度実績等）	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
授業に集中	高校生活や授業におけるルールやマナーの徹底	98%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけ（保護者97%、職員97%）、91%の生徒が授業の予鈴で着席する等、授業時間を大切にしている（職員95%）。	・ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合(95%以上)【学校評価アンケート】 ・スマートフォンの利用について、ルールやマナーの徹底を図る。	・挨拶の重要性やマナーの遵守について粘り強い指導を行い、様々な機会を捉えて保護者の理解を図るとともに、生徒に対しては「伝わる」指導を行う。 ・学校評価アンケートの結果を分析し、教育活動の改善に生かす。 ・生徒保健委員会メディア調査を通年実施し、保護者との連携を図りながらルールづくりを進めるなどしてスマートフォンの長時間利用者の指導を継続する。	・学校評価アンケートによると、ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合は98%である（保護者99%、職員98%）。 ・生徒保健委員によるメディア調査を通じたスマートフォンの使用に関わる啓発活動やLHR等を活用した指導を持続的に行っており、成果が現れている。 ・職員による挨拶指導も定着しており、校内で挨拶をする生徒が多数いる。	B	・学校評価アンケートによる学校目標は達成しており、今後も維持できるよう指導を継続していく。 ・生徒保健委員によるメディア利用に関する啓発活動について、家庭でのスマホ利用の実態調査に基づく内容などについて改善を図った。今後も職員による指導、生徒による活動を続けていくことで、ルールを守る意識を高めていく。 ・登下校時のマナー等については、毎月1回程度啓発・注意喚起を行っているので、これを継続し、地域の方から評価していただけるような生徒の育成に努めていく。
	生徒の自宅学習時間の確保	1日当たりの自宅学習時間平均（11月）は、1年82分、2年64分、3年174分であり、1年2時間以上21%、2年3時間以上2%、3年4時間以上35%である。コース別・学年別の自宅学習時間は体育コース（1年32分、2年19分、3年30分）、1年探究・総合コース90分　、総合コース（2年63分、3年156分）、探究コース（2年89分、3年308分）である。	・生徒の自宅学習時間(1,2,3年別の時間(分))(それぞれ1、2年90分、3年200分以上)【自宅学習時間調査】 ・クラス担任と教科担任、部顧問等が連携し、生徒の自宅学習時間の確保に努める。	・クラス担任が個別面談で自学、自習の状況についてフィードバックを行うだけでなく、教科担任も適宜面談を実施するなどして、学習進捗状況を確かめたり、効果的な学習指導となるよう留意する。	・自宅学習時間調査(11月実施)によると、1日あたりの学習時間は、1年生83分、2年生80分、3年生166分であり、1年生2時間以上は25%、2年生3時間以上は4%、3年生4時間以上は30.3%である。 ・学校評価アンケートによると、毎日自宅学習を行うよう積極的に指導している教員は76%である。	C	・クラス担任が学習時間の少ない生徒を把握し、教科担当者や部活動顧問と協力しながら面談等の指導を継続実施する。 ・教員は、授業と自宅学習が有機的に繋がるよう工夫するとともに、授業、クラス、部活動などの場面で生徒に自宅学習を怠らないよう指導する。
	AL9の視点による公開授業等の実施	7教科（9名）において研究・公開授業を実施した。	・AL9の視点をもって、全教科で公開授業等を実施する。【実施教科数】 ・ALの推進及び高大接続改革への対応に学校をあげて取組む。	・授業では相手（生徒同士・教員同士・生徒教員相互）に敬意を払うとともに、ICT機器等も効果的に活用し、 ①外部への表現活動（思考して解く、他人に教える、理解しながら読む、振り返りながら書く、意見や考えを述べる等のアウトプットを含む活動） ②AL9の視点による公開・研究授業を全教科で実施する。 ・ALの推進及び高大接続改革に対応するために、県内外各種研修会に積極的に参加し、校内の教育活動に還元する。	・公開・研究授業は、AL9の視点をもとに生徒の活動やICTの活用を積極的に取り入れ、全教科で17名の教員が実施した。 ・授業改革研修会は、外部講師を招いて11月に開催した。示範授業と研究協議により、ICTの活用やアウトリーチを意識した指導について見識を深めた。 ・ALの推進のための県内外各種研修会への参加を積極的に行った。	A	・今後も全教科で公開・研究授業を実施し、学力向上に向けてAL9やICTの効果的な活用について、教員相互で意見や情報を共有しながら研鑽を積んでゆく。 ・授業改革研修会は、教員の要望を取り入れながら、有意義な研修会となるよう検討し企画する。 ・各種研修会での成果の還元方策について検討する。
	（注）外部への表現活動や生徒主体の学習等を授業時間の2割(＝9分）以上取り入れることを「AL9」と呼ぶ。（以下同様）						
行事で団結・部活は熱中	地域から信頼される学校づくり	「八頭高愛し愛され運動」の参加者は第1回（6月）170名、第2回（11月）240名であり、全校生徒の半数を超えた。	・「八頭高愛し愛され運動」への参加者の割合(%)(全校生徒の55%以上)【2回の運動参加者数の合計】 ・地域課題について理解し、その解決に向けて取組む生徒を育成する。	・八頭高愛し愛され運動、中学生体験入学、翠陵祭、八頭高ライフ体験等の諸行事や学校生活等の様々な場面において生徒が主体となって企画・実施に取組むとともに、その手法を下級生に引き継ぐことができるよう指導を行う。 ・地域課題解決の一助となるアイデアを積極的に出させる等して八頭高生としてのアイデンティティーを育む。	・八頭高愛し愛され運動の参加者は、第1回（6月）が296名、第2回（11月）が262名、延べ人数558名であった。全校生徒数（793名）に占める割合は70%を越え年度当初の目標値を大きく超えることとなった。地域貢献活動には昨年と同様、書道部・吹奏楽部・華道部等が精力的に活動した。また、生徒会執行部も今年度介護老人福祉施設に出向きボランティア活動を行った。 ・今年度新たな試みとして、生徒向けに歳末助け合い募金、介護老人施設へのボランティア活動を生徒会執行部主体で実施した。また、探究ゼミの一環として、11月に八頭町高校生議会を実施し、地域課題解決に向けた提言を行った。	A	・今後とも八頭高愛し愛され運動の参加生徒数の確保を図りながら、清掃活動以外にも活動できる場を探していく。 ・地域課題解決の一助となるアイデアを積極的に提案し、生徒会執行部を中心として新たな試みを行っている。今後も地域に出向き情報を得る行動が必要である。 ・八頭町高校生議会を継続、発展させるとともに、地域をテーマにした探究活動の実施に向けた準備を進める。
	生徒の悩みへの的確な対応	80%の生徒（保護者74%、職員92%）は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。	・八頭高は生徒の心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると回答する生徒・保護者の割合（生徒85%以上、保護者75%以上）【学校評価アンケート】 ・生徒の悩みに的確に対応するため、教職員間の連携を図る。	・日々の生徒観察やhyperーQUの分析・検討会、個別面談、教育相談・特別支援委員会、教育相談係・保健係連絡会、人権教育LHR等をとおして生徒の悩みを把握するとともに、教職員同士が連携して生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう指導・支援する。	・学校評価アンケートによると、学校が生徒の心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると回答している生徒は82%、保護者は78%である。 ・今年度、「いじめアンケート」を3回、「Hyper-QU調査」を2回実施し、悩みを抱えている生徒についての情報共有を行うとともに、クラス担任、学年団、教育相談係を中心に、該当生徒のケア、あるいは、見守り（観察）を行っている。 ・要支援生徒についての情報共有を定期的に行い、クラス担任、学年団、教育相談係に加えて、各教科担任も生徒の状況を把握し、ケア、あるいは、見守り（観察）を行っている。	B	・来年度以降も「いじめアンケート」を3回、「Hyper-QU調査」を2回実施し、アンケート結果の情報共有を行い、生徒支援に生かしていく。また、アンケート以外にも、いじめの実態把握のための方策を検討する。 ・要支援生徒に関する情報共有も今後継続して行うよう計画しているので、これらの機会も活用しながら生徒の支援を行っていく。
	学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営	自宅学習を毎日行っている生徒は54%（1年49%、2年44%、3年69%）であり、56%の生徒（保護者69%）が学習と部活動の両立を果たしていると考えている。 体育コース生の全国大会出場は36名（延べ65名）である。	・学習と部活動の両立を目指して、毎日自宅学習を行っている生徒の割合(60%以上）【学校評価アンケート】 ・全国大会に出場した体育コース生が30名以上であり、学校生活、部活動をリードしている。【実人数】	・生徒が向上心と意欲をもって粘り強く取組めるよう、部活動の的確な方針や計画等を設定するとともに、学習と「両立」させた部活動運営を行う。 ・教科担任、クラス担任が部活動顧問と協力しながら面談等の指導を継続実施する。 ・体育コースでは、特色ある行事を継続実施し、学習面、生活面の充実を図り、学校生活、部活動のリーダーとしての自覚を促す。	・学校評価アンケートでは、学習と部活動の両立を目指して毎日自宅学習を行っている生徒は59%である。また、学習と部活動を両立した学校生活を送っていると回答した生徒は、全体の56%である（部活動無所属等は全体の28%）。 ・全国大会に出場した体育コース生は26名（探究・総合コースは35名、内22名が運動系競技）であり、運動部活動において活躍するとともに、リーダーとして実績を残した。	B	・クラス担任による面談、教科担当や部活動顧問による指導等で得られた情報を相互に共有し、連携を密に図りながら、学習や部活動について生徒へ個別具体的で適切なアドバイスが与えられるようにする。 ・全国大会に出場した体育コース生については、残念ながら今年度は目標に達することが出来なかった。今後とも体育コースの特色ある行事を実施し、学習面・生活面の充実を図る。
進路に挑戦	高い志望に挑戦する意欲を持った生徒や第1志望を目指して地道に努力し続ける生徒の育成 《探究》地元大学との積極的な連携、高い志望に挑戦 《総合》多様な進路に対応、第一志望を目指す 《体育》全国を目指す、基礎学力を確実に育成	進路を実現するために目標に向かって努力している生徒（10月）は、1年69%、2年63%、3年93%である。	・進路実現に向けて努力している生徒の割合（1年70%、2年70%、3年95%以上)【学校評価アンケート】 ・生徒の学力向上を通した進路実現に学校をあげて取組む。	・各コース、各分掌及び各学年等の諸行事について、その意図・意義を生徒にしっかり理解させ、有意義なものとして確実に実施するとともに、その他の校外諸活動への自主的な参加を積極的に勧める。 ・キャリア教育全体計画に基づき、「夢ナビ」ライブ、進路講演会、進路学習「大学生に聞く」、長期休業中補習、勉強合宿、定期考査前錬成補習、土曜自習・質問教室、土曜サテライン授業等を実施し、学力向上を通して進路実現をより確かなものにしていく。	・学校評価アンケートでは、進路実現のために目標へ向かって努力している生徒は全体で79%（1年67%、2年74%、3年92%）である。 ・希望制行事への参加状況としては、1・2年生で「夢ナビ」ライブに266名、夏季補習に188名、冬季補習に365名が、3年生では補習に280名、冬季補習に213名、2次向け補講に297名が参加し、進路実現へ向けて取り組んだ。（数値はいずれも延べ数）いずれの行事もほぼ想定していた数の生徒が参加した。	C	・入試改革の方向性を注視しつつ、様々な入試のあり方に対応できる指導方法を工夫していく。 ・進路実現に向けて、基礎学力の充実を図るための通年的な取り組みを検討し、全体的な計画を見直し、職員の意思統一をはかる必要がある。 ・各学年とも、キャリア設計講演会などの講演会では多様化する進路志望に対応した内容となるよう計画・実施したが、各学年をステージととらえた系統的かつ効果的な指導プランを提示していく必要がある。
		国公立大学志願者（10月）は、1年127名（4月126名）、2年 127名（1年4月127名）、3年113名（1年4月159名）である。大学入試センター試験受験者は144名（総合・探究コースの61%）であり、前年比6%減であったが、本年度は多くの生徒が5教科型で受験した。 国公立大学合格者数は45名	・国公立大合格者数の増加(60名以上)【3月末現役・過卒の合計人数】 ・生徒の学ぶ意欲を喚起するような進路指導に努める。	・生徒との個別面談等をとおして、1，2年生は所期の志望の実現に向けて強く希望進路を意識させるとともに、3年生は4月時点の希望進路の実現に努める。 ・大学・学部・学問研究の充実によって、それぞれの魅力を伝え、何を学びたいかを考えさせ、具体的な進路目標に向けて努力するように指導する。	・進路志望調査（10月）による国公立大学志望者は1年126名（47%）、2年126名（48%）、3年127名（48%）と各学年とも4月とほぼ同数であった。また、私大、短大、専門学校の志望者についても大きな変化は見られなかった。進学する意義や目的、進路を通じた自己実現について考える機会を持つよう、生徒それぞれの意識の差異に合わせた指導資料をより工夫する余地がある。 ・大学入試センター試験受験者は143名で、昨年度に比べてほとんど変化していない。	C	・大学・学部・学問研究の一層の充実のために生徒自身が主体的に進路情報を収集・活用できる環境を充実させる。 ・面接指導に資する有用な資料を紹介・提供する。 ・各大学等の実際の要項をもとに入試情報を分析・研究する。 ・本来のポートフォリオの目的を学校全体として再認識し、生徒指導に活用できるよう検討を深めていく。 ・進学する意義や目的、進路を通じた自己実現について考える機会を持つよう、生徒それぞれの意識の差異に合わせた指導資料をより工夫する。
業務改善の取組	時間外業務の縮減	時間外業務の縮減と長時間勤務者の解消に向けて、改善点の洗い出しと実現に向けた手立てをおこなう。	・月あたりの時間外業務をH29年度比で15%削減する。 ・「帰らーDAY」や「リフレッ週」の意識化を徹底する。	・複数顧問体制の柔軟な運用を進める。 ・部活動基本方針に基づいた効率的で教育的な部活動運営を意識しながら、休養日や部活動時間遵守、及び「帰らーDAY」や「リフレッ週」の働きかけを管理職を含め、教員相互におこなう。	・4月～1月分時間外勤務実績の平均値は32.3時間/人で、H29年度（30.4時間）比で6.3%の増加であった。 ・部活動休養日の徹底や部活動時間の遵守を呼びかけ、時間外業務の縮減に取組んでいる。	C	・教員相互の声かけを職場全体に広げ、時間外業務の縮減に向けた取組んでいく。

評価基準　A：十分達成〔90%〕 B：概ね達成〔80%程度〕 C：変化の兆し〔60%程度〕 D：まだ不十分〔40%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕